

## ブータンの国民総幸福量 (GNH) をめぐる旅： 京都大学ブータン友好プログラム 2018 (第 17 次隊) の報告

松沢哲郎<sup>1), 2), 3)</sup>, 坂本龍太<sup>4)</sup>, 西谷祐子<sup>5)</sup>, 加藤恵美子<sup>6)</sup>,  
竜野真維<sup>6)</sup>, 松井一純<sup>1)</sup>, 松永倫紀<sup>1)</sup>, 山極壽一<sup>7)</sup>

- 1) 京都大学高等研究院
- 2) 京都大学霊長類研究所
- 3) 京都造形芸術大学文明哲学研究所
- 4) 京都大学東南アジア地域研究研究所
- 5) 京都大学大学院法学研究科
- 6) 京都大学大学院医学研究科
- 7) 京都大学総長

### 概要

2017年10月下旬に来日されたソナム・デチェン・ワンチュク王女の招きで、1年後の2018年11月下旬にブータンを訪れた。山極壽一総長はじめ一行8名である。パロのJSW法科大学の建設現場を視察し、ティンブーで法科大学と京都大学の合同シンポジウムを開催した。また総選挙を経て就任したばかりのロテ・ツェリン首相を表敬訪問した。さらに王女と、王女の尊母である第4代王妃、王女の尊父である第4代国王ジグミ・シンゲ・ワンチュク殿下にお会いすることができた。第4代国王は国民総幸福量 (GNH) の提唱者として知られており、その懇談の中で、国づくりにかける思いをお聞かせいただいた。2010年10月に京大ブータン友好プログラムが発足して以来の懸案だった京大とブータンの60年の歴史を回顧する英語の写真集を作成し、ブータン王室はじめ関係各所に配布した。また、王女から前年に託された英語の絵本『カラスが語る、ブータンのお話』について、これを和訳するとともに、京都造形芸術大学の協力を得て原典を電子書籍化し、冒頭部分について1分間のアニメーションを作成した。それらを王女に直接お渡しした。なお滞在期間中に、古都プナカへの日帰り訪問をした。途中のドチェラ峠から、ブータン・ヒマラヤの7000メートルを超える雪の峰々をはっきりと見ることができた。

### 1. 日程と隊の構成

日程は以下のとおりである。まず、2018年11月19日に坂本以下先発6名が関西空港を出立した。タイのバンコクを経由して20日の朝にブータンのパロ空港に着いた。後発の山極と松沢は19日の夜に京都を立ち、その深夜すなわち20日未明に中部空港を出立した。先発隊にわずかに遅れて20日の朝にパロに到着した。20日は、パロに建設中のJSW法科大学の校舎群を見学した。21日は古都プナカの日帰り観光をした。途中のドチェラと呼ばれる3000メートルを超える峠からは、ブータン・ヒマラヤのほぼ全容を見ることができた。とりわけ京大山岳部が初登頂に成功したマサカン峰 (マサガン峰) がすばらしい (図1)。22日は、朝にソナム・デチェン・ワンチュク王女との謁見のあと、法科大学と京大の合同シンポジウムをおこなった。そのあと首相執務室に新首相を訪ねた。夜は第4代王妃の邸宅でソナム・デチェン・ワンチュク王女とご尊母の主催する晩餐会に招かれた。23日は、第4代国王に山極・松沢・坂本の3名の謁見がかなった。しばし歓談ののちおいとまして、荷物をまとめてパロ空港に向かった。同日午後にはパロを出て、タイのバンコクを経由して、翌24日に全員が関西空港に帰着した。

隊の構成は以下のとおりである。

山極壽一、京大総長  
松沢哲郎、京大高等研究院、副院長・特別教授  
西谷祐子、京大大学院法学研究科、教授

坂本龍太、東南アジア地域研究研究所、准教授・医師

加藤恵美子、京大大学院医学研究科、博士課程大学院生・医師

竜野真維、京大大学院医学研究科、博士課程大学院生・医師

松井一純、京大高等研究院、事務部長

松永倫紀、京大高等研究院、事務掛長

## 2. 隊の成立とその背景

2017年10月の王女の訪問について、『ヒマラヤ学誌』19号に、訪問の詳細を記録として残す作業をした<sup>1), 2)</sup>。先代国王の名代として来日されたソナム・デチェン・ワンチュク王女は聡明で美しい方だった(図2)。現在の第5代国王の妹にあたる。1981年のお生まれなので38歳。結婚して2人の男の子がいる。米国ハーバード大学を卒業して、スタンフォード大学で法学の博士学位を取得したそうだ。

日本では女性皇族は結婚すると皇室を離れるが、ブータンでは王女に生まれれば結婚しても王女のままで、いわゆる臣籍降下しない。宮家は創設しないで、王女の身分のまま生涯を過ごす。これは極めて分かりやすくかつ合理的な制度だといえる。男系をもって皇統を継ぐ日本の現行制度とも矛盾しない。その王女の一代限りのことで、あくまで王室の一員として王女のまま生涯にわたって国王を補佐する制度である。ソナム・デチェン王女のばあいは、彼女の経歴をいかしてブータンの法曹の要職にある。JSW法科大学の総長で、ブータン弁護士会の総裁で、新設した司法研修所の所長を務めている。

王女には絵本『カラスが語る、ブータンのお話』がある。帰国に際してこのご著書をいただいた。カラスはブータンの国鳥であり、カラスの口を借りて憲法について語ったものだ。それを和訳すべきと考えた。また、そもそも2010年の第1次隊のときに第4代国王から託された「京大関係者がブータン調査で撮影した写真等の映像アーカイブの作成」という積年の課題があった。

京都大学とブータンとのご縁は1957年の秋に遡る。当時、第3代王妃だったアシ・ケサン・チョデンワンチュク妃殿下(すなわち現在の第5代国王の祖母、Her Majesty the Royal Grand Mother Ashi

Kesang Choeden Wangchuck)がお忍びで京都に滞在し、それを2人の京大教授が応接したことに始まる(図3)。桑原武夫と芦田譲治である。当時ブータンの山はすべて未踏峰だった。彼らは京大の登山隊をブータンに送りたかったのだ。ご縁があり、その京都大学学士山岳会(AACK)の現会長を松沢が務めている。ちなみに学部生時代スキー部員だった山極壽一はAACKの名誉会員でもある。

2017年に、京大とブータンの交流が60周年の節目を迎えた。記念の事業として第4代国王ジグミ・シンゲ・ワンチュク陛下を京都大学にお招きしてシンポジウムを開催することを企画した。あいにくそれはかなわなかったが最愛の王女すなわちソナム・デチェン王女を派遣してくださったのである(図4)。そもそもなぜ現5代国王ではなく、父で先代の第4代国王なのか。それは国民総幸福(あるいは国民総幸福量、GNH)という概念を提唱した方だからだ。1970年代早々に国民総幸福という理念を掲げた。国内総生産(GDP)や国民総生産(GNP)ではなくて、GNHこそが重要だという。国王として2008年に憲法を制定し、自ら王制を廃して立憲君主制に移行した。日本国憲法の第9条は戦争放棄として有名だが、ブータン国憲法の第9条は国民総幸福を規定している。国の政策の基本原理は国民総幸福の追求にあると定めた。また国王に定年制を敷いた。議会によって王を廃することもできる規定まで盛り込んである。

さて、答礼の事業を2018年(平成30年)に遂行するために。関係者・関係部局と協議して、平成29年度の王女招へいに続いて、平成30年度の総長裁量経費の支援を仰ぐこととした。平成30年2月28日に高等研究院から総長裁量経費の申請書を提出した。幸い、5月22日に採択通知をいただいた。事業区分は、「③京大の魅力を社会や世界に向けて発信する教育研究活動、広報・社会連携活動を推進する事業」である。事業名は、『京大とブータンとの連携事業：ブータンでのGNH学術交流シンポジウム「未来地球社会のためのGNH：京大ブータン友好プログラム国際シンポジウム」の開催』である。要求額875万余円で交付額660万円を措置された。当初申請額の約75%だった。

本事業は、高等研究院を主務部局とする10部

局（他に、ヒマラヤ研究ユニット・東南アジア地域研究研究所・霊長類研究所・野生動物研究センター・教育学研究科・医学研究科・医学部附属病院・地球環境学堂・こころの未来研究センター）の合同提案である。

### 3. 第17次隊がめざしたこと

本事業がどういう意図のもとに計画されたかを記録に留めるために、総長裁量経費に記載した「1. 事業の概要・目的」と「2. 事業の実施方法」と「3. 期待される効果」を書き記す。

「1. 事業の概要と目的」は以下のとおりである。なお、正確を期して残すために原文通りとし、以下の文中の太字でハイライトした部分は申請書提出時のままとした。

ブータンに京大の教職員学生合計10名を派遣し、GNHシンポジウム「未来地球社会のためのGNH：京大ブータン友好プログラム国際シンポジウム」の開催を通じて学術交流のさらなる進展をはかり、大学間交流協定が締結5年目を迎えた節目にその更新をおこなう。シンポジウムでは、国連の掲げる政策目標であるSDGsに象徴される持続的発展と、ブータンもその門口に立った高齢化社会をとりあげ、そうした自然や社会の抱える課題に立ち向かう理念としての「GNH（国民総幸福）」について討議する。なお、GNHの提唱者である第4代国王ジグメ・シンゲ・ワンチュク（Jigme Singye Wangchuck）殿下の参加を要請する。

昨年10月（注釈：平成29年10月）、総長裁量経費の支援を得て、ブータン王立大学の設立者でありGNHの提唱者である第4代国王の名代としてソナム・デチェン・ワンチュク王女を招へいし、京都大学の主催する学術交流シンポジウムを京都で開催した。王女一行は、山極壽一総長や湊長博プロボスト（筆頭理事）らと懇談し、さらに京大病院や法学研究科はじめ多くの部局の参加を得て今後の交流計画を討議した。また王女は1週間の滞在中に皇后・皇太子夫妻・秋篠宮夫妻とも懇談して両国の友好の礎を築き、京都大学が両国の架け橋として寄与した。その王女帰国の際に、ブータン側から1年後の京大隊のブータン訪問が要請・招請され、今回の訪問団とシンポジウム事業の立案に到った。

京都大学とブータンの交流は、第3代王妃が

1957年秋に京都を訪問され、京大教授の桑原武夫らが応接したことに始まる。翌年、本学卒業生の中尾佐助による最初のブータン調査がおこなわれ、その後、ブータンとの連続とした関係が60年間構築されてきた。この間に、総長裁量経費により、2010年（平成22年）秋にブータンへの使節団が派遣され、第4代国王との謁見が実現した。これを契機に「京都大学ブータン友好プログラム」が結成された。

2013年（平成25年）8月に京都大学とブータン王立大学との大学間交流協定が締結された。この協定をもとに2016年（平成28年）7月11日には、高等研究院を窓口として、ブータン王立大学の全カレッジの長を含めた使節団を迎えて、共同研究を推進するための学術交流会を実施した。そして2017年10月に上述のソナム・デチェン王女の来日がようやく実現した。京都大学は、ユニークな社会・国際貢献として、日本とブータンの学術交流の「窓」となり「架け橋」となってきた。本事業は、「京大の魅力を生社会や世界に向けて発信する教育研究活動、広報・社会連携活動」として、ブータン王家を代表して来日したソナム・デチェン王女への答礼として、京大側がブータンに赴きGNHに焦点を当てたシンポジウムを開催することを目的とする。なお、京都大学ブータン友好プログラムの実績については、以下のサイトを参照されたい。<https://www.kyoto-bhutan.org/>

「2. 事業の実施方法」は以下のとおり。

第4代国王ジグメ・シンゲ・ワンチュク殿下のお出ましを打診したところ昨年（平成29年）ようやく最愛のソナム・デチェン王女の来日が実現した。その王女自身が窓口になって、本事業の企画する第4代国王との会見ならびに学術交流シンポジウムへのお出ましを打診して下さることになった。訪問にあたっては、ブータンに詳しい者を事前打ち合わせに派遣して、10月下旬から11月上旬にかけての約1週間にわたってブータンに訪問団を派遣する計画である。ブータンは、第4代国王が主導してGNHを1970年代に提唱した。GNPやGDPという国民総生産の指標を補完する新たな視点として、近年、世界的に高い注目を浴びている。その先駆的業績に対して「KYOTO地球環境の殿堂」の第2回（2011年）表彰がなされた。GNHの国ブータンに焦点をあて、京都大

学とブータンの60余年間の交流を基盤に、両者の紐帯をより強固なものにしたい。訪問前の重要な事業が2つある。①ソナム・デチェン王女が書いた絵本「カラスが語る幸せの国ブータン(仮訳)」のアニメ化を託されたため、この絵本のアニメ化と邦訳をする。②60年の交流史のビジュアルアーカイブを作成する。60年前のブータンの写真はブータンにとっても稀少で、このアーカイブ化を第4代国王に託された。こうした宿題を解決して手土産とし、訪問中のイベントとして、ソナム・デチェン王女を通じて、現国王・前国王との面談、さらには両大学の学術交流5周年記念GNHシンポジウムを首都ティンブーで開催する。なお大学間交流協定の締結校であるブータン王立大学のほか、王女が総裁をつとめるロースクール(Jigme Singye Wangchuck School of Law)、ロイヤル・ティンブー・カレッジ(学長は京大のASAFASに客員教授として来られたこともある元教育大臣のThakur Singh Powdye氏)、ブータン医科大学(学長はKinsang P. Tshering氏で招へい経験があり、夫人は元京大研究員の西澤和子博士)、ブータン研究センター、保健省、経済産業省などをシンポジウムの共催に含める。訪問成果については、昨年の王女招聘事業と同様に、「ヒマラヤ学誌」第20号への掲載、京大ブータン友好プログラムのHPその他のメディアで発信する。また、帰朝報告のシンポジウムを京都大学百周年記念館で開催し、京大サロンの壁面を利用した写真展をおこない、またこれを機会に、京大とブータンの交流史を紹介する英文カラー写真入り小冊子を作る。

「3. 期待される効果」は以下のとおり。

京都大学とブータンの友好の歴史をたどると、2017年秋がちょうど60周年だった。この節目の年に第4代国王の名代としてソナム・デチェン王女を招へいし、学術交流シンポジウムを開催することができた。そのフォローアップとして、61年目となる2018年は、未来志向の新たな事業を起こす絶好の機会である。幸い、王女の側からの熱心な招請があり、ブータン訪問の機会は熟したといえる。今回の訪問とGNHシンポジウムの開催は、京都大学とブータンの友好をより強固なものとするものと考えられる。すでに京大と王立大学の大学間交流協定は締結されたが、5年の期間を経て実績をもとにそれを更新する絶好の機会に

なる。またブータンにはほかにも王家の関与する王立ティンブーカレッジ等があり、さらにはソナム・デチェン王女の主導する法曹機関がある。今回の訪問を契機として、日本とブータンの重層的な研究・教育交流への拡がりが見込まれる。京都大学が「窓」となり「架け橋」となることで、「京大の魅力」を社会や世界に向けて発信する教育研究活動、広報・社会連携活動」となり、「ブータンといえば京大、京大といえばブータン」ともいえる実績を活かし、京都大学らしいユニークな社会・国際貢献になると期待できる。

#### 4. 第17次隊の渡航準備

総長裁量経費の採択通知を待っているのは時機を失するので、2018年(平成30年)2月末の申請書を出した段階で11月を念頭にすぐに渡航準備を始めた。3つの課題があった。

①王女から託された英語の絵本について、昨年(平成29年)の王女の来日時の事務を担当してくださった左海陽子さんに和文への翻訳をお願いした。京大大学院文学研究科のご卒業で、これまでもフランス・ドゥパールの英語の論考の翻訳などを手掛けてこられた。原題は“The Raven tells a story”で、UNICEFの支援を受けてブータンで発行されたものである(図5)。左海陽子さんが『カラスが語る、ブータンのお話』と題して和訳した。ブータン王国憲法の成り立ちとその意義について、1人の少年シンゲの成長とともに、わかりやすく記述した作品だ。憲法について、権利と義務について、愛国心について書いてある。国民主権、国家、国民総幸福について書いてある。いわば、2008年に発布されたブータン王国憲法の精神を、わかりやすいことばで書き記したものだといえる。この翻訳については、「ヒマラヤ学誌」本号で公開し、さらに京大ブータン友好プログラムのホームページで公開する。

②絵本のアニメーション化については、京都造形芸術大学の学長の尾池和夫先生(元京大総長)を通じて、造形大の丹羽貴大教授を紹介いただいた。それによって、全編をe-book化することができた。さらに冒頭部分について、1分間のアニメーション化ができた。早くも3月末には、そうしたものが整った。さらに出発まぎわになって再度のお願いをしたところ、e-bookとアニメーション



図1 ドチェラ峠から遠望したマサカン峰。京大山岳部隊が1985年に初登頂に成功した山である(撮影、2018年11月21日、松沢哲郎)。



図2 ソナム・デチェン・ワンチュク王女と山極壽一京大総長。(撮影、2017年10月26日、提供：京都大学ブータン友好プログラム)。



図3 1957年秋、京都を訪問した第3代王妃(前列中央)。桑原武夫教授(後列)と芦田譲治教授(後列右端)の2人の京大教授が応接した(提供：京都大学学士山岳会)。



図4 2017年10月26日に京大で開催された交流60周年記念シンポジウムのポスター(提供：京都大学リーディング大学院霊長類学・ワイルドライフサイエンス)。

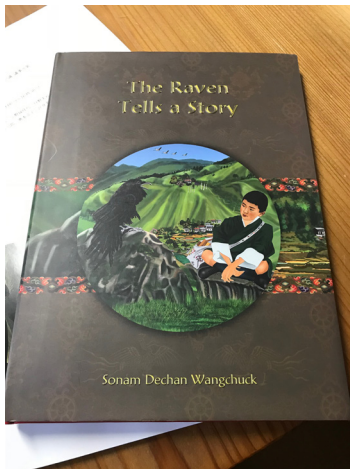


図5 『カラスが語る、ブータンのお話』原著(撮影、松沢哲郎)。



図6 アニメーション化された『カラスが語る、ブータンのお話』(提供：京都造形芸術大学)。

ンの双方を内蔵したアップル社の iPad を京都造形芸術大学のほうからご寄贈いただいた。これは後述する 11 月 22 日のシンポジウムで公表したのち、同日夕刻の晩餐会でソナム・デチェン王女に手渡すことができた (図 6)。

③京大の 60 年間の映像資料については、今回の隊員の加藤恵美子と竜野真維の 2 人の大学院生が担当して関連資料を集めた。その膨大な資料を短期間にたいへん要領よく美しくまとめた 2 人の隊員に、深く敬意を表したい。その結果として、『Memories of the Sacred Kingdom』と題した英文の写真集を作成することができた (図 7)。プータン王室のプライベートな姿も数多く写った写真集である。念のため慎重を期して、限定 100 部の私家版として発刊し、かつ 1 番から 100 番までのナンバリングを施して、だれにどの本が手渡されているかを管理した。100 部のうち最初の 30 部をプータンに持参して第 4 代国王、第 5 代国王ほか関係者に配布することとし、残り 70 部は日本の関係者に配布することとした。実際に、上記のとおり配布をすでに完了している。なお、掲載には間に合わなかった貴重な資料や、今回の訪問の写真を含めて改訂版を用意して、適当な時期に発刊する予定である。

こうした京大に所属する資料と並行して、1958 年の中尾佐助氏 (京大学士山岳会会員、大阪府立大学助教授 = 当時) のプータン踏査の貴重な資料が大阪府立大学の中尾佐助アーカイブとして保存され公開されている。これについては、京都大学霊長類研究所長で京大ヒマラヤ研究ユニット長である湯本貴和教授を介して大阪府立大学の山口裕文先生と交渉していただいた。その結果、中尾資料だけをまとめた CD とその解説文書を山口先生からいただくことができた。実際に、11 月 23 日の第 4 代国王との面談時にそれを手渡した。

こうした準備を進めるうちに 5 月 22 日に総長裁量経費の採択の知らせを得た。当初計画では京大の教職員学生合計 10 名をプータンに派遣し、GNH シンポジウム「未来地球社会のための GNH: 京大プータン友好プログラム国際シンポジウム」の開催を通じて学術交流のさらなる進展をはかる予定だった。予算規模が 25% 削減されたので、派遣を 10 名から 8 名に削減し、予定通りのシンポジウムを、JSW 法科大学を相手先機関と

して、首都ティンプーで開催することにした。

まず山極壽一総長と尾池和夫元総長のお二人にお声がけをさせていただいた。幸い、お 2 人とも参加に前向きなお返事をいただくことができた。「教職員学生 8 名」という規模に収めるために慎重に人選した。その結果、他の 6 名の人選を終えて 6 月 22 日に隊員選考結果を各人にお知らせして、直後の 6 月 26 日に第 1 回「プータン連絡会」を開催した。山極 + 尾池に加えて、6 人の教職員学生という布陣である。なお、9 月に尾池先生から健康面への配慮 (ティンプーは標高 2400 メートルの高地にあるため酸素が薄い状況) から不参加の意思が表明された。一方で、プータン側から法学研究者の参加要請を受けており、代わりに西谷祐子教授に参加を要請して快諾いただいた。以上の結果、山極総長はじめ教員 4 名、学生 2 名、事務職員 2 名という隊の構成になった。

「プータン連絡会」は、隊の実務を担う松沢・坂本・加藤・竜野・松井・松永の 6 名を構成員とした。6 月 22 日を初回として、7 月 31 日、8 月 27 日、9 月 18 日、10 月 10 日、11 月 6 日と、ほぼ毎月 1 回の頻度で開催して、11 月 19 日の出発に到った。隊としておこなう事業、すなわち映像アーカイブによる 60 周年記念写真集や絵本の翻訳・アニメ化などの作業、旅行日程のつめ、持参する土産品などを検討して実行した。なお、帰国後の 12 月 3 日に第 7 回の連絡会を開催して渡航結果の総括をおこなった。次回 1 月 16 日には帰国報告写真展とシンポジウム開催を検討し、さらに 2 月と 3 月にも連絡会を開催して本年度の事業を終了する予定である。

## 5. 第 17 次隊の行動記録

以下に第 17 次隊の行動記録を詳述する。ただし著者たちを代表して、第一著者の松沢の私的な感慨を中心とした記載にした。他の隊員については、それぞれのこれまでのプータン滞在を背景にして、個別の論文としてヒマラヤ学誌 20 号に寄稿していただくこととした。

2018 年 11 月 19 日に坂本以下先発 6 名が関西空港を出立し、タイのバンコクを経由して 20 日の朝にパロ空港に着いた。後発の山極と松沢は 19 日の夜に京都を発ち、その深夜すなわち 20 日未明に中部空港を出立して、先発隊にわずかに遅

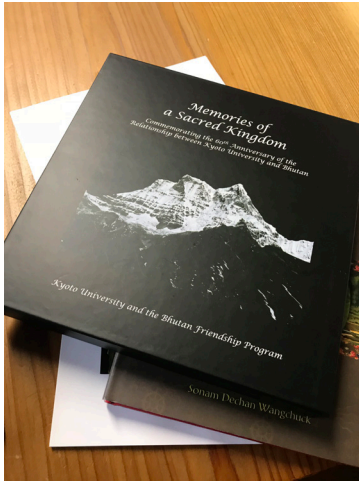


図7 交流60周年記念写真集『Memories of the Sacred Kingdom』(撮影、松沢哲郎)。



図8 中尾佐助ビジュアル・アーカイブの紹介CD (作成：大阪府立大学・山口裕文)



図9 パロに建設中のJSW 法科大学院キャンパスを視察した第17次隊(提供：京都大学ブータン友好プログラム)。



図10 1985年の京大山岳部によるマサコン峰の初登頂。山頂に旗を掲げる横山宏太郎登攀隊長(提供：京大山岳部)。



図11 ドチェラ峠から遠望するガンケルプンスム峰の南面。ブータンの最高峰でかつ未踏峰である(撮影：松沢哲郎)。



図12 プナカの寺院の庭の菩提樹の下で憩う山極壽一総長(撮影：松沢哲郎)。

れて20日の朝にパロに到着した。すなわち、隊員全員8人が20日朝にパロ空港に集結した。今回の旅の差配をしてくれたブータンの旅行会社ブータン・ローメン・アドベンチャーを主宰するカルチュン・ワンチュク氏らの出迎えを受けた。カルチュンとは1995年の最初のブータン渡航以来、20余年にわたる旧知の間柄である<sup>3)</sup>。

20日の午前中は、マイクロバスでパロ近郊に建設中のJSW法科大学(Jigme Singye Wangchuck Law School)を見学した。ブータン初のそして唯一の法科大学である。現在の第5代国王の勅命で2015年に創設された。JSW Lawと略称されるこの法科大学では、法にかんする教育をおこない、法学ならびに関連分野の研究を推進し、あわせて文化の涵養と伝統的価値の推進を旨とする。

今回の招へいの対応者であるソナム・デチェン・ワンチュク王女が総長をしている法科大学である。昨秋に来日したサンゲイ・ドルジ氏が学長(学務長)をしている。大学はスタートしたが固有のキャンパスがまだない。パロ郊外に新キャンパスを造成中だった。ドルジ氏から全体の建設計画を聞いたあと、工事中ということで全員がヘルメットを着用して、建設現場を視察した(図9)。大学の建物は伝統的なブータンの建築様式である。現場を指揮する方々が若い女性たちだったことが印象深かった。すでに1学年20名程度の学生の募集が始まっており、また外国人教師も配置されていた。

パロのJSW法科大学の建設地を視察したあと、車は首都ティンブーに向かった。わたし自身でいうと、1995年、2010年、2013年に続いて、この2018年が4回目のブータンの訪問になる。20余年を隔ててみると、ティンブーは毎回着実に宅地化が進んで、建物の数が多くなっていた。一点だけ変わらないのは街に信号機の無いことだ。人口10万人をはるかに超える都市だが、信号機がひとつもない。交差点はロータリーというかサークルすなわち円環状になっている。つまり四方から集まる車がいったんサークルの中に入って、そこから目指す街路に出ていく仕組みだ。途中、交通渋滞に近いものを味わいながら、街の中心街といえる時計塔のある広場前のホテルに止宿した。

21日はブナカの日帰り旅行だった。ティンブーからブナカへは、ドチェラと呼ばれる3000メー

トルを超える峠越えの道になる。幸い、11月下旬で、ポストボンスーンの時期にあたり天候は安定していた。ドチェラからブータン・ヒマラヤの7000メートルを超える雪の山々の全貌を見ることができた。なんとといっても最初に目をひくのは、左端に見えるマサコン(マサガン)峰である。1985年に京都大学山岳部の遠征隊が初登頂した。隊長は堀了平、副隊長は栗田靖之、登攀隊長が横山宏太郎であり、京大山岳部の現役学部生を主体とする遠征隊だ。登攀を指揮した横山宏太郎によると、地元住民の聖山であることに配慮して、頂上のすこし手前で登山活動を終了した。すなわち厳密な意味での頂上を足で踏むことは遠慮したという(図10)。

ドチェラから見る正面の雪の連山もすばらしいが、右端にひととき大きく聳えるガンケルプンツム(ガンカールプンスム)に目が釘付けになった(図11)。ブータン・ヒマラヤの最高峰である。しかも未踏の最高峰だ。京大山岳部の同期生の高木真一が、京都の下宿の壁にこのガンケルプンツムの写真からおこした自筆の絵を掲げていたのが思い出される。高木は、1973年のヤルンカン遠征で8000メートルを超える高所で活躍し、翌1974年のK12遠征では初登頂に成功した。しかし7000メートルを超える高所で2晩の無酸素でのビバークを余儀なくされて帰還できなかった。同行の伊藤勤とともにシアチェン氷河側に墜落したと考えられている。ドチェラ峠から、すなわちその南面を見る限り、ガンケルプンツムの登攀ルートはきわめて厳しい。雪と氷と岩の混じった急峻な稜線をたどることになる。はて、どうしたものかなあ、と考え込むうちにあつというまに休憩の時間が過ぎてしまった。

今回のブナカ行では、ブナカ宮殿を歩き過ぎた先にある寺院を参観した。全員にとって初めて訪れる場所だった。車を停めて、川を渡り、左岸側の丘の上に登る。40分間ほどの登り路だった。行く手の右側には棚田が広がるのんびりとした風景で、上流に目を凝らすと雪をかぶった白い山が見える。この寺の白眉は、巨大な仏像群である。ほかの寺院で見る仏像とは違って、インド、ブータン、ネパール、チベットの仏教美術においてよく見られる、男性尊格が配偶者と性的に結合したかたちだった。いわゆる男女両尊とか、男女合体



尊と呼ばれるもので、男性尊格が蓮華座にて座し、伴侶がその腿に腰かける座位の構図である。男性が女性を抱いた正確で精緻な造形だった。その寺院の前庭には菩提樹が大きく枝を張っていた。普段は多忙を極める山極総長に、菩提樹の下で憩うひとときがあった（図12）。

ブナカ宮殿を見下ろすホテルのレストランで昼食をとった。訪問4回目にして初めて来る場所だった。川を挟んで対岸の右岸の高台から左岸の宮殿を見下ろすかたちになる。その景色が新鮮だった（図13）。全容がよく見渡せる。そのあと、いつものように橋を渡って宮殿の中を参拝した。ひとつ気が付いたのは、インド人観光客の多さだった。仏教徒ではない彼らにとって、エキゾチックな物見の対象だ。一方で、ブナカ宮殿は仏教徒の僧侶が日々生活する場所でもある。インドからは自動車でかんたんにブータンに入ってこられて、こうした観光対象になっている。それがブータンにとっては重荷になっているように見えた。

22日は、JSW法科大学と京大の合同シンポジウムをおこなった。シンポジウムは、「科学研究の文化を推進する：ブータン最初の法学校に対する京都からの貢献（Promoting a Culture of Academic Research: Lessons from Kyoto for Bhutan's first law school）」と題した。多様な学問分野に開かれたシンポジウムだが、JSW法科大学それ自体は、国民総幸福量（GNH）と法（Law）と発展（Development）がキーワードだという。先代国王の頭文字であるJSWが冠された大学である。それにちなんで言うと、正義（Justice）・奉仕（Service）・知恵（Wisdom）を旨とし大学にしたいとサンゲイ・ドルジ学長が述べていた。

朝いちばん、シンポジウムが始まる前に、それに参加するソナム・デチェン・ワンチュク王女に一行が謁見する機会を得た。約1年ぶりにお会いすることになった。お元気そうで、変わらぬお姿だった。山極総長らとしばし懇談され、他の参加者全員とのシンポジウム記念写真に納まった。そのあとのシンポジウムは、厳粛な仏教徒の儀式から始まった。法科大学の主旨のひとつに「文化の涵養と伝統的価値の推進」がうたわれているゆえんだと理解した。ブータン側の開催趣旨説明をサンゲイ・ドルジ学長がおこない、日本側の挨拶を松沢がおこなった。同時に、持参した英語の写真

集とアニメーションの紹介をした。

主な出席者は、JSW法科大学総長でもあるソナム・デチェン・ワンチュク王女（The President of JSW Law, HRH Princess Sonam Dechan Wangchuck）、サンゲイ・ドルジ学長（学務長、JSW Law dean of academic affairs Sangay Dorjee）、そして最高裁長官のチェリン・ワンチュク氏（Chief Justice Tshering Wangchuk）はじめ、ブータン国立司法研修所（BNLI, Bhutan National Legal Institute）、ブータン王立大学（Royal University of Bhutan）、ケサル・ギャルポ医科学大学（Khesar Gyalpo University of Medical Sciences）の代表者らだった。

JSW法科大学との合同シンポジウムなので、中核となるセッションではブータン側は法学者をそろえていた。JSW法科大学の研究代表のクリステイ・ドゥルメール博士（JSW Law head of research Kristy DeRemer）ほかの方々である。一方、京大側は山極・松沢・坂本・西谷がそれぞれの研究の視点から講演した。主役は大学院法学研究科から参加した西谷裕子教授だった。西谷先生は国際法が専門ということで、その話題提供に対して参会者からも多大な関心が寄せられた。

シンポジウムの最後に、山極総長とサンゲイ・ドルジ学長のあいだで贈り物の交換があり、そこで交流60周年記念に作製した写真集を寄贈した（図14）。予定時間を大幅に超過して終了したのち、引き続き昼食会がもたれ、そこでも参会者のあいだでインフォーマルな会話が続いた。

なおシンポジウム参会者の中にブータン王立大学の関係者も含まれており、2013年に締結した覚書（MoU）が5年を経過したため、その更新について双方に異存がないことを両方で確認した。実際に、第17次隊の帰国後に、京大とブータン王立大学の事務担当者同士の話し合いが進み、平成30年末の時点で双方の署名を取り交わすところまで進んでいる。

22日の夕刻に、新首相に就任したロテ・ツェリン氏を訪ねた（図15）。首相執務室は、政府庁舎であるタシケゾンの対面にある建物の中にある。2018年11月7日すなわち約2週間前に新内閣が発足したばかりだ。立憲君主制移行期の2008年以来3回目となった10月の国民議会（下院47議席）総選挙で、彼の率いる協同党が30議席を獲得して初めて勝利した。ブータンは、北は中国

と、南はインドと国境を接している。大国のはざままで外交的にきわめて難しい立場にある。新首相は、首都と地方との格差是正、貧富差の解消、そして王室を尊崇してブータン文化の継承を重視している。掲げた公約の実現が目ざされている。

ロテ・ツェリン氏は、もともとは泌尿器科の外科医である。日本への留学経験もあることを面談で明かされた。岡山大学である。なお今回の隊員に加藤恵美子がブータン滞在中に同僚医師という関係ですでに面談があった。その医療手技の腕前を「天才的だった」と評した彼女のことが印象深い。メスを持ち替えて、国のために働くということなのだろう。新首相は多忙を極める方なので、執務室前の廊下でかなりの時間待つことになった。「クエンセル」というブータンの代表的な新聞が開架展示されていて、そこには秋篠宮眞子内親王殿下のブータン訪問の記事が1面に掲載されていた。ブータン王室と日本の皇室とは密なお付き合いがある。

新首相は若くて穏やかな方だった。ちょうど王宮が見える位置にあり、第5代国王の執務するようすをつねに思い浮かべながら国のかじ取りをしている、という主旨の発言が新鮮だった。立憲君主制という政体だが、王室の占める位置と重みが尋常ではない。逆にいうと、ブータンでは王室も治政から無縁ではいられないので、これまたたいへんだろうなと思った。

22日の夜は、ソナム・デチェン・ワンチュク王女と、彼女のご尊母である第4代王妃の主催する晩餐会に招かれた。第4代王妃の邸宅である。尊顔を拝してみると、王女はどちらかという父親似だと思った。第4代国王には4人の王妃がいるが4人ともが姉妹である。その中の最も年長の方がこの王妃だ。気さくな方で、参加者ひとりひとりに対して、年齢やしごとの中身など詳細な質問をしておられた。

会食の始まる前にサプライズが用意されていた(図16)。ソナム・デチェン・ワンチュク王女には二人の息子さんがおられるが、その下の息子さんがいわゆる活仏になっている。まだ幼いが僧形である。その姿で挨拶に出てこられた。しかも、山極総長にはゴリラのぬいぐるみを、松沢にはチンパンジーのぬいぐるみを用意してくださっていた。それをくださるというのだ。まったく予想も

していなかったので、ただひたすら驚き恐縮したが、何ものにも代えがたいお土産を頂戴するかたちになった。

退出する際に第4代王妃からもじきじきにお土産をいただいた。帰国してから開いてみると、折り畳み式になっている木の机だった。表面に精巧な彫刻が施されている。昨年、ソナム・デチェン王女から京大へということで託されたタンカと呼ばれる仏画とともに、いまは自室で飾っている。

23日は午前中に、山極・松沢・坂本の3名が第4代国王にお会いすることができた。2010年に松沢は松林公蔵さんとともにお会いしている(図17)。したがって今回が2回目ということになる(図18)。面談に先立って、ブータンの男性の盛装の着物がわれわれ3人に下賜された。女性はキラと呼ばれるが、それに対して男性はゴと呼ばれる着物である。ブータンに詳しい坂本の見立てでは、かなり高価なものだという。しかも3人のゴは、それぞれ微妙に色と模様が違っていた。

前回の2010年に訪問したときと比べて宮殿のたたずまいがちょっと違う感じがした。先代国王みずからが玄関にまで出迎えてくださって恐縮した。山極総長にはそのまま「プレジデント」と呼びかけるが、「松沢」も「坂本」もしっかりとその名前をおぼえてかつ正確に発音されて呼びかけていてこれもたいへん恐縮した。しかも、山極総長はゴリラの研究者で、松沢がチンパンジーの研究者で、坂本がブータンの高齢者の地域医療に貢献していることもしっかりとご存じだった。ご息女であるソナム・デチェン王女を通じて、おそらく事前にじゅうぶんなブリーフィングがされていたのだろう。

約1時間にわたる懇談だった。国民総幸福量(Gross National Happiness)が、当初はHappiness幸福ではなくて、Content満足度という表現を考えたという。ただ言葉のもつインパクトから、正確さを求めるよりやはりHappinessにしたそう。そうした2010年の懇談のときにも述べられていたGNHがらみの持論を再度お聞きすることができた。

山極総長がゴリラ、松沢がチンパンジーの研究者ということもあり、話の冒頭から「ブータンにも類人猿(ape)がいる！」とおっしゃったのは驚いた。実際にいると信じるに足る証拠もある、



図 13 プナカ宮殿を右岸の台地から遠望する (撮影：松沢哲郎)。



図 14 シンポジウムで交歓する山極壽一京大総長とサンゲイ・ドルジ JSW 法科大学長。手渡しているのは写真集『Memories of the Sacred Kingdom』である (提供：京都大学ブータン友好プログラム)。



図 15 新首相ロテ・ツェリン氏と山極壽一京大総長 (提供：京都大学ブータン友好プログラム)。



図 16 ソナム・デチェン・ワンチュク王女の令息である活仏からサプライズの土産物をいただいた山極壽一総長と松沢哲郎特別教授 (提供：京都大学ブータン友好プログラム)。



図 17 2010年10月19日、第4代国王に謁見した (提供：ブータン王室)。



図 18 2018年11月23日、第4代国王に謁見した (提供：ブータン王室)。

実際にいるはずだからトラップカメラで撮影できるね、と先代国王は言う。「スノーマン」という言葉を使っておられた。イエティー、雪男のことである。ブータン・ローメン・アドベンチャーを主宰するカルチュンの話では、ブータンのトレッキングの最長のものは「スノーマン・トレック」と呼ぶ1か月のものがあるという話を思い出した。「ぜひ、スノーマンを探しに行きたいですね」と申し上げた。

別れ際に差し上げた60周年記念写真集でも、1985年のマサコン峰の登山写真に目を留められた。信仰の対象である、聖山であると、いう思いが当方にはあったが、先代国王は登山という行為をネガティブにとらえるような発言はいつさいされなかった。逆に、「実際に登ったのか?」「どんなところだった?」、自分も行ってみたいという主旨の発言だった。先代国王のお手元には、マサコン峰の英文登山報告写真集が届けられるべきだと改めて思った。実際に横山登攀隊長の言によれば、その山頂のすこし手前で引き返している。山を信仰対象とする地元民の気持ちにも寄り添うような、登山という行為でかかる自然環境への負荷も最小限にするような、新しい登山の仕組みや流儀をブータン・ヒマラヤから発信するというのはいかがだろうか。

先代国王との歓談ののち、荷物をまとめてパロ空港に向かった。空港に向かう途中でリンボチュ(活仏)の一行の車列と偶然に出会った。路ばたには出迎えの人々が深く頭を垂れている。するとその頭に棒のような尺のようなもので軽く触れてくださる。そうした人々の列にわたしたちも並んで恩恵に浴した。

同日午後にはパロを出て、タイのバンコクを経由して、行きとは逆のルートで翌24日に全員が関西空港に無事に帰着した。

## 6. 今後の課題

「京都大学ブータン友好プログラム(英語略称、KU-Bhutan)」の第17次隊は、出発前に6回のブータン連絡会を開催して出発準備を整えた。帰国後の12月3日に第7回を開催した。年明けてさらに懇談の機会をもって、当初の事業予定通りに写真展や報告シンポジウムを年度内に実施する。

振り返れば、2016年4月に、「京都大学ヒマラ

ヤ研究ユニット(代表:湯本貴和霊長類研究所長)」が新たに発足した。これは、京都大学の教育研究ユニットのひとつであり、京都大学が承認する正式な組織である。それ以後、京都大学ブータン友好プログラムは、ヒマラヤ研究ユニットの傘下にある事業として位置づけられる。

京大ブータン友好プログラムの主要事業として、2016年度には、ブータン王立大学一行を京大に迎えた。2017年度には、ソナム・デチェン・ワンチュク王女を招へいして交流60周年の記念シンポジウムを開催した。2018年度には、山極壽一総長以下8名がブータンを訪問した。いわば大学としてさらなる交流を推進する決意を見せたといえる。

京都大学ブータン友好プログラムは、それ自体が推進母体となって、第1次から第17次までのブータン訪問団の派遣をおこなってきた。そのHP(<https://www.kyoto-bhutan.org/ja>)ですべての派遣団の活動が公開されている。この機会に改めて確認すると、2010-2015年度の6年間に、それぞれ4、4、2、2、1、3回の派遣をおこなった。その後の2年間(2016年度と2017年度)に派遣はしなかった。ひととおり、京大の教職員学生の多数がブータンを経験したと判断したからでもある。実際に今回の第17次までを総合計すると、派遣回数は17回で、派遣人数は延べ113人(うち教員が56人、事務・技術職員が10人、学生等が47人)が、合計で220日間にわたってブータンに滞在したことになる。

この2年間は派遣の代わりに招へい・応接に時間を割いたともいえる。ブータン王立大学からの一行の応接、ソナム・デチェン・ワンチュク王女の一行の招へいをおこない、60年間の交流をあらためて再認識した。まる3年間にわたりプログラム独自には派遣空白期間があるが、その間にも京大の医学研究科、附属病院、東南アジア地域研究研究所、教育学研究科など多数の部局から派遣団がでている。ブータンとの交流は定着したといえるだろう。

今回、山極壽一総長がブータンを訪問した。総長の情報発信のレポートリーの中に「ブータン」とか「国民総幸福量」というキーワードが取り込まれた。それがもつ意味は大きい。京大とブータンとは60余年の交流の歴史があるが、それがより

広く深く人々に知られる契機となるからである。では、これから何をするのか。それは、京大の教職員学生の個々の発想と力量にかかっているのではないだろうか。大学の使命は、研究・教育・社会貢献にある。そのいずれの分野でも、ブータンは魅力的なフィールドといえるだろう。これからの時代を担う若い人材の新鮮な発想に期待したい。

2017年の招へい、2018年の派遣という2つの事業を通じて、ソナム・デチェン・ワンチュク王女という稀有な架け橋をもつことができた。ブータンから日本へ、日本からブータンへ、さらに多くの人材の交流が期待されている。京都大学ブータン友好プログラム第17次隊の派遣は、そうした将来への布石、ひとつのステップストーンになったといえるだろう。

## 謝辞

京都大学ブータン友好プログラム第17次隊の派遣は、＜京大とブータンとの連携事業：ブータンでのGNH学術交流シンポジウム「未来地球社会のためのGNH：京大ブータン友好プログラム国際シンポジウム」の開催＞と題して、平成30年度総長裁量経費に申請し採択された事業である。京都大学の10部局の合同事業だ。高等研究院・ヒマラヤ研究ユニット・東南アジア地域研究研究所・霊長類研究所・野生動物研究センター・教育学研究科・医学研究科・医学部附属病院・地球環境学堂・こころの未来研究センターである。その各部局の皆様の支援なしには本事業を実施できなかった。関係各位の尽力に感謝したい。ブータンとの60年の交流史を英語の写真集としてまとめるにあたって、栗田靖之、横山宏太郎、松林公蔵、竹田晋也氏はじめ京都大学学士山岳会の会員諸兄の協力を得た。また故中尾佐助さんの大阪府立大学所蔵の映像アーカイブの利用については山口裕文先生ならびに京大霊長類研究所長の湯本貴和先生、また故西岡京治さんの資料については夫人の里子様のご協力を得た。王女から下賜された絵本の翻訳については左海陽子氏、そのアニメーション化については、京都造形芸術大学の尾池和夫学長、丹羽貴大先生、西井先生らの協力を得た。ここに記して感謝したい。またブータン側については、招へいして下さったソナム・デチェン・ワ

ンチュク王女ならびにJ S W法科大学のサンゲイ・ドルジ学長ならびにそのスタッフの皆様のお世話になった。王女のご母堂である第4代王妃と、ご尊父である第4代国王には、貴重なお時間をいただき欲待していただいた。ブータン国内の旅の手配はブータン・ローメン・アドベンチャーを主宰するカルチュン・ワンチュク氏のご支援をいただいた。紙幅の関係ですべての方のお名前を挙げられないが、こうした方々のご尽力に対して深く御礼を申し上げたい。

## 参考文献

- 1) 坂本龍太, ブータンと京都大学との友好60周年の記念事業についての報告, ヒマラヤ学誌, No.19, 10-22, 2018
- 2) 松永倫紀, 松井一純, 松沢哲郎, 京大ブータン連携60周年記念行事ロジスティクス, ヒマラヤ学誌, No.19, 23-32, 2018
- 3) 松沢哲郎, 辻本雅史, 池上哲司, 成瀬哲生, 出水明, ブータンにおける初等教育の素描: 小学校とNAPEプログラム, ヒマラヤ学誌, No.6, 93-110, 1995

## Summary

### **A Journey to Gross National Happiness of Bhutan: The 17<sup>th</sup> Mission of Kyoto University Bhutan Friendship Program**

Tetsuro Matsuzawa<sup>1),2),3)</sup>, Ryota Sakamoto<sup>4)</sup>, Yuko Nishitani<sup>5)</sup>, Emiko Kato<sup>6)</sup>, Mai Tatsuno<sup>6)</sup>, Kazuyoshi Matsui<sup>1)</sup>, Michinori Matsunaga<sup>1)</sup>, Juichi Yamagiwa<sup>7)</sup>

- 1) Kyoto University Institute for Advanced Study
- 2) Primate Research Institute, Kyoto University
- 3) Institute for Philosophy and Human Values, Kyoto University of Arts and Design
- 4) Center for South-East Asian Studies, Kyoto University
- 5) Kyoto University Graduate School of Law
- 6) Kyoto University Graduate School of Medicine
- 7) President, Kyoto University

Her Royal Highness Princess Sonam Dechan Wangchuk of Kingdom of Bhutan visited Japan from October 21 to 27, 2017. A year later, thanks to the invitation from HRH, we visited Bhutan from November 20 to 23<sup>rd</sup>. This article aims to describe the journey to Bhutan, the country as known as Gross National Happiness (GNH). This is the 17<sup>th</sup> mission of Kyoto University Bhutan friendship program (KU-Bhutan). The mission consisted of 8 members including Juichi Yamagiwa, the president of Kyoto University. We first visited the JSW School of Law in Paro where the construction of the new campus was going on. In Thimphu, the capital of Bhutan, Kyoto University and JSW School of Law held the joint symposium titled “Promoting a Culture of Academic Research: Lessons from Kyoto for Bhutan’s first law school”. This gave us the opportunity to look back the historical role of Kyoto University bridging the two countries, Bhutan and Japan, and also to look for the future collaboration. We also visited Bhutan’s newly elected Prime Minister Lotay Tshering to congratulate him on his election win. We also had the audience with His Majesty the 4<sup>th</sup> King and Her Majesty the 4<sup>th</sup> Queen, who are the father and the mother of HRH Princess. His majesty the 4th King of Bhutan, Jigme Syngye Wangchuk, is the person who coined the words of GNH in 1970’s. The 17<sup>th</sup> mission of KU-Bhutan made the photo book in English titled “Memories of the Sacred Kingdom” that illustrated the 60 years history of Kyoto University and Bhutan since 1957. The book was presented to His Majesty the 4th King and other persons and organizations in Bhutan. HRH Princess Sonam Dechan Wangchuk has published a children’s book titled “The Raven tells a story” that describes the importance of Constitution. The book was given to us last year and it was translated into Japanese. We also made the e-book, and one-minute sample animation of the children’s book. Those materials were presented to HRH Princess. This animation was achieved by the help from Kyoto University of Arts and

Design led by the President Kazuo Oike, the former president of Kyoto University. During the stay in Bhutan, we enjoyed the one-day trip to Punakha. On the way to the ancient Capital, we drove over Doche La Pass over 3000 m high. We enjoyed watching the beautiful snow mountains above 7000m high in Bhutan Himalaya.

## 付録：第17次隊「ブータン連絡会」記録

概要：昨年度にソナム・デチェン・ワンチュク王女一行が来日した。その際に、『ヒマラヤ学誌』19号でロジスティックスを記録し公表した。それと同様の趣旨で、今回のブータン訪問準備について「ブータン連絡会」の活動記録を紹介する。「ブータン連絡会」は、隊の実務を担う松沢・坂本・加藤・竜野・松井・松永の6名を構成員とした。6月22日を初回として、7月31日、8月27日、9月18日、10月10日、11月6日と、ほぼ毎月1回の頻度で開催して、11月19日の出発に到った。アーカイブス写真集の制作など各事業の方針決定及び進捗管理、出張日程の検討及び持参する土産品などの検討・実施を担当した。毎回、加藤と竜野の両氏がその場で議事録を作成した。これによって欠席者を含めてほぼ即時に情報共有が可能となった。活動記録の全般が議事録に集約されているので以下に紹介する。

### 第1回議事録（2018年6月26日）

日 時：2018年6月26日（於 京都大学高等研究院）

参加者：松沢、坂本、松井、加藤、竜野、松永

- ・メンバー顔合わせ
- ・事業計画書の読み合わせ、計画の確認
- ・最大の目的は、第四代国王と総長の面会を実現すること
- ・渡航までの課題として、以下を行う。
  - ①ソナム王女作の絵本のアニメ化、②京大・ブータン交流史のビジュアルアーカイブ作成
- ・全体終了後に、基調報告シンポジウムおよび写真展、京大・ブータン交流史についての小冊子を作成する。
- ・ブータン滞在中の日程、シンポジウム式次第についての打ち合わせ

### 第2回議事録（2018年7月30日）

日 時：2018年7月30日（於 京都大学高等研究院）

参加者：松沢、坂本、松井、加藤、竜野、松永

#### 【報告事項】

- ・ブータン側に提出するリクエストレターを求められ提出した。現在、返答待ち。
  - 第4代国王・現国王への面会の依頼
  - 総長の署名を求められていたが、下記の事情などを検討の結果、松沢先生の署名とした。
    - ◇ブータン側の都合がつかなかった場合における先方の心情・立場への配慮
    - ◇総長の署名を頂くための公的手続きおよび公的な意味合いへの配慮
- ・訪問メンバーに法学部の人物を含めて欲しいとの要請があった。
  - ソナム王女来日時部の局懇親会に参加して下さった、西谷祐子教授（国際司法・国際取引法）へ依頼しており、ご本人もしくは代理の方の同行をお願いする予定としている。
- ・以前、京都造形芸術大学で、尾池先生と坂本先生によるブータンに関する講演があった。このように、ブータン来訪前に、ブータンの風習や歴史について学ぶことが必要である。

#### 【進捗確認】

- ・絵本アニメ化：前回ミーティングから進捗なし
- ・visual archive：加藤・竜野で大まかな交流史と写真集めを行った。
  - これに加えて、西岡氏と王妃の交流（米本昌平氏撮影のものを頂く）、京大医学部・ブータン王立病院/保健省との交流、2010年の京大・ブータン友好プログラム発足と4代国王拜謁、2016年のブータン王立大学副学長訪問は大きなイベントなので必要。
  - 京大とブータンとの交流について、各部門できる限り細部にわたっての目録をつくる。



- ▶ブータンに関する日本語の書籍の目録を作る（英語書籍のないことが、相互に対等な交流をする上での将来の課題である）
- ▶交流史に写真を添えるような形をイメージしている
- ▶写真は、集まった分をメンバー皆で閲覧できるようなフォルダ・アーカイブを作り、取捨選択や注釈について議論していく（平田加奈子さんにお願ひする）。
- ・渡航に関して：バンコク→パロのフライトスケジュールが未定のため進捗なし
- ▶約3ヶ月後までスケジュール公表されているので、もうすぐ予定がたつはず
- ▶バンコクでの乗り継ぎの時間が短いことが予想され、これが問題点である。  
乗り継ぎの間隔が1時間半未満であり、通常は乗り継ぎ可能だが、万が一乗り遅れた場合に保障されない。
- ▶総長は出国前に予定があるため出発を前倒しすることができない。  
総長と松沢先生のみ、バンコクで乗り継ぎに遅れた場合のバンコク→パロの翌日便も確保しておく、他のメンバーは確実に乗り継ぎができる早めの便でバンコクに到着しておく。（こうしておけば、万が一遅れた場合の予備の確保が2席ですむ）
- ▶チケット手配は国内の旅行会社に依頼しているが、バンコク→パロに関しては「ブータン・ローメン・アドベンチャー」へ委託している。ブータンの旅行会社であり、最も確実にチケット確保が可能と思われる。

【次回以降の予定】

第3回：8月29日 17時（加藤さんは不参加）

第4回：9月18日 13時

第5回：10月10日 17時

【活動の予定】

2018年9月21日 16:30-18:00（於：京都大学 吉田泉殿）

文明哲学セミナー「ブータンを訪ねて：“幸福”を考える」（松林公蔵 先生）

第3回議事録（2018年8月30日）

日 時：2018年8月30日（於 京都大学高等研究院）

参加者：松沢、坂本、松井、竜野、松永

【滞在中のスケジュール確認】

- ・坂本さんより配布資料：ブータン側作成の日程表

■スケジュール

1日目：ティンブー到着

- ・出迎えについて

総長と松沢先生はリムジンで送迎して下さるとのこと。

※尾池先生も配車調整を依頼する必要あり。他のメンバーはバス。

2日目：プナカ訪問

国王から面会のお声がかかった場合に対応できる場所のほうが良いのでは？

→山極先生、尾池先生がブータンを訪問される機会は今回限りかもしれない、プナカでよいだろう。

3日目：シンポジウム

- ・「国王へ表敬訪問」でなく、「国王がシンポに訪問される」というセッティング
- ・表敬のメリットとして王宮でリラックスして話せるという点があるが、第一王妃（ドルジ・ワンモ、ソナム王女の母）の部屋でのディナー招待ありと。  
（行程表には明記されておらず、国王が参加されるかは不明）

- ・1日目の午後 or 2日目、国王の都合が良ければお会いできるかもしれない。
- ・西谷先生にプレゼンを依頼する。
- ・開会・閉会の挨拶の人選：opening 松沢先生、closing 山極先生とする

#### ■ホテル

王女が総長を訪問される可能性があるので、ホテルはドゥルクホテル（ティンブー中心部にあるホテル）にした方が良い。全員このホテルに宿泊することとする。

#### 【アニメーションの制作状況】

- ・デモの段階まで制作できているとのこと。
- ・左海さんが和訳してくださっている（現在作成中）。
- ・王女秘書のテンジン氏が、アニメの進捗状況について気にかけておられ、途中段階でも良いので、いまできている分を送ってほしいとのこと → 何らかの方法で送るようにする（坂本さん）

#### 【飛行機の手配】

山極先生・松沢先生

0:20 中部空港発 → 5:10 バンコク着（タイ航空）

6:30 バンコク発 → 9:55 パロ着（ブータンエアライン）

- ・乗り継ぎ間隔が1時間20分あるので、保証の範囲内ではある。
- ・しかし、万が一乗り継ぎできなかった場合のための翌日便も予約しておく。
- ・バンコク乗り継ぎ時の空港内移動案内を、タイ空港へ依頼する。

他のメンバー

- ・バンコク→パロ便については、山極先生・松沢先生と同じ飛行機に乗るが、早く出発して確実に乗れるようにする
- ・関空 17:30 → バンコク 22:00があるが、もう少し早い便の方が楽だろう（無理のない便を選択する）
- ・バンコクで1泊する（近郊or空港内ホテル）

帰りの飛行機

- ・帰りもブータンエアにする、10:35発
- ・ブータンエアからタイ航空への荷物の積み替えは、航空会社がしてくれる（タイ航空→ブータンエアはサービスなし。）

#### 【ビジュアルアーカイブ・文献目録の進捗確認】

- ・進捗状況の報告（別紙：ミーティング資料参照）：大筋OK
- ・入手が必要な写真について、提供を依頼する
  - ▶西岡京治氏の写真：栗田先生に依頼（坂本さん）
  - ▶こころの未来・霊長類研究所・山岳部（松沢先生）
  - ▶教育学研究所・防災研究所・地球環境学堂（坂本さん）
  - ▶中尾佐助アーカイブへの写真使用許可依頼（竜野）
- ・全体で200ページ、写真600枚くらい、25×25 cm大判写真集をイメージ
- ・200部程度印刷し、30部程度持参するイメージか
- ・タイトル：the Memory of a Sacred Kingdom (Friendship of Kyoto University and Bhutan 1957-2018)
- ・1985年までの交流史：それ以降=2:1 くらいのウエイトで、古い年代の交流やブータンの様子、王室の様子などに重点をおいた構成にする。
- ・前回の写真集との重複可。ブータン人訪日の写真も含める。
- ・王族の写真は、独立した章をつくる（不敬にならないよう配慮）
- ・写真は1項目につき50枚くらいを目安にする
- ・中尾佐助アーカイブからは40枚くらい

・巻末に文献目録とヒマラヤ学誌ブータン関連論文のタイトルをいれる

Bibliography of Himalayan Studyとして

【次回以降の予定】

第4回：9月18日 17時（※開始時刻変更あり、注意！）

第5回：10月10日 17時

【ブータン関連の勉強会など】

■2018年9月21日 16:30-18:00（於：京都大学 吉田泉殿）

文明哲学セミナー「ブータンを訪ねて：“幸福”を考える」（松林公藏 先生）

■2018年9月1日～28日

ブータン映画「ゲンボと消しの夢見るブータン」上映（出待座）

（9月1日 12:30の回は、熊谷さんの特別公演あり）

#### 第4回議事録（2018年9月18日）

日 時：2018年9月18日17:00-18:30（於 京都大学高等研究院）

参加者：松沢、坂本、松井、竜野、加藤、松永

【アニメーション制作状況】

松沢先生より報告

・アニメーション11-13分くらいのもので、3000万円くらいかかる。予算として厳しいので、尾池先生と相談し、以前作ったものに追加する方針。

【尾池先生の渡航について】

松沢先生より報告

・尾池先生に健康面の心配あり、高所低酸素のブータンは負担がかかるので、今後、キャンセルの可能性もある。

▶次回打ち合わせ（10/10）までに方針を決める。（松沢先生）

【滞在中スケジュール、ブータン現在の状況】

坂本さんより報告

①滞在中のスケジュールについて、ブータン側に修正をお願いした。問題なしとの返事。

②ブータンの政権交代が確実。現与党が負け、10月18日の選挙では前与党VS新党  
新党は親王室。

【飛行機の手配】

松井さんより報告

・旅行会社より、先発隊はバンコクで後発隊の状況に関わらず、ブータンまで先に行ってしまった方がいいのではないかと提案。（チェックインしてからの便の変更は不可能なため。）

行き：山極先生・松沢先生

11/20 0:20中部空港発⇒5:10 バンコク着（タイ航空）

6:30 バンコク発⇒9:55 パロ着（ブータンエアライン）

行き：他メンバー

11/19 11:00 関西空港発⇒バンコク着（タイ航空） バンコク一泊

11/20 6:00 バンコク発⇒8:00 パロ着（ドゥルクエア）

帰り：全員

11/23 10:30 パロ発⇒16:05バンコク着

23:15 バンコク発⇒6:25（11/24）関西着

・ブータンエアラインはたまに、いきなりキャンセルになることがあるため、山極先生、松沢先生も6:00（11/20）バンコク発のドゥルクエアと一緒に乗る方法はないか検討する。

→関空23:45 (11/19) 発→バンコク4:00 (11/20) 着 (エアアジア) がある。確認する。

【アーカイブ制作状況】

- ・現在はレイアウトを作っている。およそ170ページくらいになる見込み
- ・大阪府立大学学術情報室に写真使用のための、申請書依頼する。

→出版社：なし、発行部数：100部、発行日：11月 で申請

- ・印刷見積もりについて

印刷のみで86万円。予算を抑える方法がいくつかあり。

25cm×25cm→22cm×22cm、部数200部→100部で再見積もり

予算すべて込みで100万まで。80万円くらいでできないか当たる

- ・西岡里子さんに写真の使用について直接、松沢先生からおうかがいを立てる
- ・謝辞の文を書いていく。(坂本さん、竜野、加藤)
- ・前書きとあとがきを書いていく。(松沢先生)
- ・英文校正について、坂本先生が当たってみる。
- ・皇后さま、皇太子さまとソナム王女の写真の肖像権については、松沢先生が宮内庁へ聞く。
- ・写真を提供していただいた方には、完成したアーカイブはお渡しする方針。
- ・次回打ち合わせの10/10で最終版として印刷に回す。
- ・9/24に全体構成チェック (松沢先生、竜野、加藤)

【その他】

- ・前回ソナム王女からいただいたタンカが飾ってある写真をとっていく。タンカを置けそうな場所が東南研にあるか、確認 (坂本さん)
- ・ブータン側へのお土産について考える
- ・今回の渡航について、ヒマラヤ学誌にそれぞれが、投稿する予定とする。締切りが厳しいので、帰国後にすぐに提出できるように準備する (竜野、加藤)

【次回以降予定】

第5回：10月10日 17時

第6回 (最終)：11月13日 17時

第5回議事録 (2018年10月10日)

日 時：2018年10月10日 (於 京都大学高等研究院)

参加者：松沢、坂本、松井、竜野、加藤、松永

【アーカイブについて】

見本を確認。

- ・坂本先生が、栗田先生の写真を使っているところは、すべて本人に確認する。竹田さんにもアーカイブを作ることをお話する。
- ・今後は、1年後くらいに京大出版会から出す方針。今回のアーカイブはパーソナルなものという立場。
- ・西岡里子さんに確認いただいた、内容を変更した。

内容について

- ・黒でOK
- ・ページを打つ
- ・背表紙をつける
- ・表紙のphoto byはいらない。
- ・Photo credit は今のままでOK
- ・総長のサインについて、松永さんが確認する。1ページ目の写真は削除して、そこに総長のコメント

をいれる。

- ・表紙はテカリあり。
- ・中の紙はテカリなし。
- ・章の変わり目上質紙で入れる。タイトルと数字。
- ・30部くらいはケース付きにする。
- ・京大にきたブータン人の写真が少ない印象。Guest from Bhutanをもっと膨らませます。

#### 渡す人について

松井さん・松永さん、坂本さん、竜野・加藤がそれぞれ、リストアップする。

<本を渡す人リストアップ一部>

- ・5代国王 ・3代王妃 ・4代国王 ・4代国王妃 ・ソナム・デチェン・ワンチュク王女
- ・Kesang Choden Wangchuck王女
- ・カルチュンさん ・ニデュブドルジ ・サンゲイドルジ 法学校学長

#### 【スケジュール】

尾池先生はキャンセルとなった。

#### 【飛行機】

飛行機、ホテルは確定した。

ホテル、現地移動費等も確認⇒OK

支払いの方法について、現地で現金で支払うのもっていく（USD）

#### 【おみやげ】

- ・坂本さんが来週中にはお土産を最終決定する。
- ・royal familyの3名には別のものを考える。
- ・山極総長に聞いてみる。（ロイヤルの3人には）

#### 【次回以降の予定】

第6回：11月13日17時

### 第6回議事録（2018年11月13日）

日時：2018年11月13日17:00-18:30（於 京都大学高等研究院）

参加者：松沢、坂本、松井、竜野、加藤、松永

【総長とのブリーフィング】 11/12 17:30-18:00 松沢、坂本、松井、松永

- ・坂本さんから全体内容の説明、松井さんからフライトスケジュールの説明
- ・お土産：お香を四代国王へのお土産として総長より追加注文

#### 【渡航経費】

- ・ホテル代、現地移動費等
- 現地で一括して支払う。事前に日本円でまとめて集金、両替する（本日ミーティング時に集金済み）

#### 【ビジュアルアーカイブ】

- ・本の納品：16日に高等研に納品（午前中・検取所を通過して4Fへ）
- 一人5冊を分担してブータンへ持っていく（加藤・竜野の分は坂本さんが回収し東南研に保管）
- ・高等研からMKタクシーに荷物をピックアップしてもらう
- ・アーカイブ原稿の最終版をPDFでもらって、ホームページに掲載する

#### 【他大学から】

- ・大阪府立大学から中尾佐助アーカイブの冊子とCD-Rをいただいた。  
（ブータンへの贈答用：坂本さん、京大保存用（予備）：松沢先生が持参予定）  
※これもホームページに掲載したい
- ・アニメーション3分程度のもの（造形大学 丹羽さんからいただく予定）

造形大としては、今後、徳山豊さん（理事長）、丹羽さんが再度ブータンを訪問し、製作に関しての  
うち合わせをする方針でいるとのこと。（制作費の問題は？）

【フライトについて】

- ・集合時間 9:00 タイ航空Dカウンター（坂本・松井・松永・加藤・竜野）
- ・乗り継ぎ：バンコクではウエストに向かい、transfer counterへ。

その近くのエスカレーターで2階へ。

【その他】

- ・アーチェリー観戦、バター茶試飲を旅程に組み込むリクエストは承諾された。
- ・高山病対策として坂本さんが治療薬ダイアモックスを持参する。
- ・緊急連絡先を作成して共有する。Wifiは共用を一つ手配しているが、通常は各自ホテルのwifiを利用する。
- ・旅費は各自で旅行代理店への振込み（もしくはカード決済）手続きが必要。金額は請求書参照。
- ・帰国後、写真展を行う。30枚程度のパネル（アーカイブより20枚、渡航時のもの10枚程度）  
1ヶ月程度の展示期間、サロンの予約状況をみて相談する。
- ・ヒマラヤ学誌の寄稿 坂本・加藤・竜野は1稿ずつ、松沢・松井・松永で1稿を製作する

12月3日 17:00 第7回 ブータン連絡会

1月16日 17:00 第8回 ブータン連絡会

2月12日 16:00 帰朝報告「第1回京都大学ブータン友好フォーラム」開催

2月5日から3月3日 京大サロンで写真展を開催

まとめ

以上の通り、定期的な連絡会と議事録の共有により、適宜の進捗管理が可能になり、全体として円滑な事業遂行につながった。加えて、昨年度の王女来日時と重複するメンバーであり、相互の役割や立場が共有されていたことも、限られたメンバーでの効率的な事業実施に寄与したと思われる。連絡会は、帰国後の総括ミーティング（12月3日）及び今後展開される2-3月の報告会と写真展に向けて、引き続き活動をおこなって解散予定である。この活動を通じて形成された記録及び実施のための手法が、今後とも類似の事業に活用されることを祈念する。末尾ながら、関係者の皆さまに心より御礼を申し上げたい。